

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01596

研究課題名(和文) 児童養護施設実践のソーシャルワーク化に向けた支援環境の整備に関する研究

研究課題名(英文) Introduction Research on Systematization of Social Work Practice in Children[s Home

研究代表者

北川 清一 (Kitagawa, Seiichi)

明治学院大学・社会学部・研究員

研究者番号：50128849

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が取りあげる児童養護施設は、わが国におけるソーシャルワーク専門職の実践現場として最も近代化・専門化が遅れていると指摘されている。また、そのような状況を放置してきたことについて、国際連合は、再三にわたり「人権侵害」として関係者に勧告してきた。実践環境の改善を提言するにあたり、本研究では、実践事例を収集し、そこから抽出した課題の対応策として、ソーシャルワーク理論が提起する「skill」や「art」を支援の過程(hellping process)においていかに身体化(performance)できるかを提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「行政の下請の人材としての社会福祉士」と言われるわが国における社会福祉専門職を取り巻く閉塞的状况を開く「方略(strategy)」について、「かわり困難」を口実にせず「一歩前に踏み出す」支援例を収集し「事例集」として取りまとめた。本研究では、それを「制度化未対応」と命名し、施設養護に参与するソーシャルワーカーの職責(社会的な責任)とされるボトムアップ型政策提言を発信する「支援的態度(attitude)」の「形」の一つとして提起することができた。

研究成果の概要(英文)：The child care home which this research takes up is indicated that modernization and specialization are most late as a practice setting of the social work professional in our country. Moreover, United Nations has advised the persons concerned as "human rights abuse" and again about having neglected such a situation. This research bring up an improvement of a practice enviroment. Besides, this researccollected practice examples and raised how this research could somaticize "skill" which social work theory raises, and "art" in the process (hellping process) of support as measures of the subject extracted from there (performance).

研究分野：ソーシャルワーク

キーワード：ソーシャルワーク 家族ソーシャルワーク 施設養護論 社会福祉組織論

## 1. 研究開始当初の背景

現在、わが国の市民生活は、人口の急速な超高齢・少子化や、新型コロナウイルス感染拡大の影響と相まって激しく揺れ動く事態にある。かかる状況下に置かれた家族は、著しく「流動化」「浮遊化」し、「紐帯の断裂」「アイデンティティの喪失」状態に陥り、社会階層の違いを超えて既に危険水域に入り込みつつある。その中で、3年間にわたり取り組んできた研究主題は、厚生労働省が立ち上げた「新たな社会的養育の在り方に関する検討会」の成果を政策指針として発出（2017年8月）した「新しい社会的養育ビジョン（以下、「ビジョン」とする）」と些か異なる切り口（viewpoint）から、「家族支援」の一翼を担うべき児童養護施設の「ソーシャルワーク組織化」および施設養護の「ソーシャルワーク化」に向けた作業のパラダイム転換を提起することとした。

## 2. 研究の目的

児童養護施設実践は、現在、久しく用いてきた「施設養護」に代わり「施設養育」と呼称することが一般化した。しかし、そこには欠落した問題がある。名称変更の際に問いかけた課題は、実践現場の建築物の構造についてのことなのか、子どもの事情に応じた「手のかけ方（専門性を身体化した際の実践方法）」についてのことなのかが定かでなく、少なくとも両者に焦点をあてて提起された事実を公刊された文献から読み取ることはできない。その多くは、所与の制度的枠組み（「ビジョン」）に依拠して論じたものであり、「施設養護の基底にある要養護児童の実態と乖離した綺麗事ではないソーシャルワーク実践」と一蹴し、児童養護施設実践を「養育」と表記する必要を言及した故・木下茂幸（美深育成園）に代表されるが、本研究の主題とするソーシャルワークの実践基盤として共有されている「人」と「課題」の「個別化」を重視する志向性とは明らかに異なっている。以下、児童養護施設実践の「ソーシャルワーク化」を論じるにあたり、「施設養護」の「特徴」であり「障壁」とも言われてきた「集団生活」（規模の大小を問わず第二次集団として形成された施設生活は当事者にとって快適性や融通性等に欠ける元凶となる）の特殊性を勘案し、実践論を再検討する際の素材を整理する。

## 3. 研究の方法

児童養護施設に限らず、いかなる組織も、内部に共有された価値観や行動規範、信念が、構成員の行動や組織の活動に影響を及ぼしてきた。この目に見えにくい力動が、組織や構成員の行動パターンの生成にどの程度まで影響を受けるのか、その力動が何らかの不利益をもたらす方向に作用したならば、それを食い止める操作の試みはソーシャルワーク（組織）の場合も重要なテーマになる。かつて、K. Lewinらが言及したように、構成員（個人）の行動や性向は、人間の内面だけでなく取り巻く環境要因からの影響も受けるため、児童養護施設も、その両面から措置を要した子どもと家族に内包する「破綻したメカニズム」を検討すべきと論じる所以である

本研究では、社会福祉制度の伝統的な実践現場として機能する生活型施設の中でも中核的役割を担ってきた児童養護施設における実践の質的保証を維持するにあたり、「家族支援」を主題に定め、日々の支援の形態的特徴をなす「集団」生活を媒介 (helping media) としたソーシャルワーク実践の展開を担える人材育成とスーパービジョンの取り込み方法について検討を加えた。

具体的には、児童養護施設に就労する生活支援スタッフ間でソーシャルワーク専門職としてのアイデンティティ (identity) の共有を図り、それを日々の支援の過程で内実化できる実践環境を整える方法の探求に努めた。そのため、研究協力を依頼した救世軍機恵子寮、救世軍世光寮、別府平和園、札幌市役所、札幌市児童相談所、複数の元児童相談所児童福祉司を交えての協議を重ね、研究計画に沿って「事例」の収集と「事例分析」を繰り返し、ヒューマンエラーが頻発する支援の過程の閉塞状況をもたらす「障壁」を明らかにすることにした。そして、明らかになった「障壁」の超克を図るため、ソーシャルワーク専門職に相応しい「課題解決能力の育成」を促すスーパービジョンの確立を図る「施設養護の過程を支えるスーパービジョンシステム」の構築に向けた「方略」を示すことに努めた。

#### 4. 研究成果

当初の研究計画では、研究課題の先進国としてあげたデンマーク (コペンハーゲン) 及びカナダ (トロント: ヨーク大学) での現地調査を実施し、その成果をわが国の関連領域に取り込む方略 (strategy) を提起することになった。しかし、今般の新型コロナウイルス感染の広がりのため、両国共に入国が困難になり現地調査を断念することにした。

そのため、国内での実践現場を研究の対象とする計画を練り直した。わが国におけるソーシャルワーカーとしての人材育成とスーパービジョンの役割および機能の機能不全状態、さらに、わが国の社会福祉現場 (とりわけ児童養護施設) に側聞できるソーシャルワーカーという専門職の「自律性」が著しく阻害される要因について、現場関係者から「事例」の提供を受けて研究協議を重ねながら、幾つかの超克しなければならない「課題」が明らかになった。

特に、子どもと家族を支援する専門職および組織が、施設内で潜在的に広がっていた「不適切なかかわり = いわゆる 非対称性の課題」を見逃し、機能不全に陥った当該施設および関連機関との協議を重ねながら、浮上した問題点の是正に向けスーパービジョンの視点から本研究が貢献できる可能性を共有できるまでになった。その際に共有できた事項を「キーワード」として示すなら「児童養護施設実践のソーシャルワーク化の促進」「スーパービジョンのシステム化の促進」「ケース管理責任 (ケアマネジメント) 体制の確立」「施設養護の内部質保障システムの確立」「施設養護の一貫性と退所後支援の連続性の担保」「アセスメントデータの管理と活用法」「多職種との連携と本人 (家族) 支援」となる。今後は、継続した研究活動として「児童養護施設における家族ソーシャルワークの展開可能性」に取り組む準備に着手したい。

#### 参考文献

- ・村岡末広「福祉施設の運営をめぐる問題と課題」『社会福祉研究』15、鉄道弘済会、1974年。
- ・木下茂幸「養育の危機」『養育研究』1、小舎制研究会・養育研究所、1981年。
- ・村田久行『ケアの思想と対人援助（改訂増補版）』川島書店、1998年。
- ・大橋謙策「地域福祉計画とコミュニティソーシャルワーク」『ソーシャルワーク研究』28（1）、相川書房、2002年。
- ・北川清一「グループを媒介とするソーシャルワークの展開 - 児童養護施設における脱ケアワーク論序説 - 」『ソーシャルワーク実践研究』1、ソーシャルワーク研究所、2015年。
- ・藤間公太『代替養育の社会学 - 施設養護から「脱施設化」を問う - 』晃洋書房、2017年。
- ・北川清一、高田祐介「現代は家族が抱える生活課題に対応する家族ソーシャルワークの展開可能性 - 児童養護施設の 制度化未満 実践に学ぶ - 」『ソーシャルワーク実践の事例分析』15、ソーシャルワーク研究所、2022年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 北川清一	4. 巻 14
2. 論文標題 社会福祉組織のソーシャルワーク化を阻む要因の分析と対処行動 - 「組織原理」と「専門職原理」の拮抗関係を手がかりに -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク実践研究	6. 最初と最後の頁 41 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 北川 清一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 ソーシャルワーカーのための養護原理－小規模化・家庭的養育をどう捉えるか－	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	耕田 昭子 (Kohda shoko) (20772578)	明治学院大学・社会学部・研究員  (32683)	
研究分担者	高田 祐介 (Takada Yusuke) (20880066)	明治学院大学・社会学部・研究員  (32683)	
研究分担者	川向 雅弘 (Kawamukai Masahiro) (80737841)	聖隷クリストファー大学・社会福祉学部・教授  (33804)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	稲垣 美加子  (Inagaki Mikako)  (30318688)	淑徳大学・総合福祉学部・教授     (32501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関